

県コンクリート診断士会(会長:地濃茂雄新潟工科大学名誉教授)

## 28年度・第1回技術セミナーを開催

コンクリート構造物の塩害損傷事例を報告

県コンクリート診断士会

はこのほど、28年度第1回目となる「技術セミナー」を新潟市内で開催=写真=、会員など約50名が参加した。

今回のセミナーでは、先ごろ行われた現地研修会の報告が行われた。この中で、村上・山北地域の海岸に隣接するコンクリート構造物5か所の劣化状況について報告。うち、村上市の旧吉浦小学校体育館の状況では、山側よりも海岸側でひび割れなどの損傷が大きく、教科書どおりの劣化となっていたとして「海側の塩分付着(飛来)は山側の3倍になっているのではないか」や「壁面のかぶりが薄い所で鉄筋腐食による爆裂で鉄筋が露出している」などといった劣化の要因が指摘され「塩害損傷の進行を抑制するには壁面の定期的なメンテナンスを行うことが重要だ」とした。参加者からは、劣化状況の評価や補強技術などより実践的な技術力の向上を図ろうと活発な意見が交わされていた。

セミナーではこのほか『知覚に基づく

鉄筋コンクリート構造物の老朽化に関する診断技術』



をテーマに地濃会長をコーディネータとするシンポジウムも開かれた。このうち“現場における知覚的判断”として(株)水倉組の本田明氏が「施工の際、不安がありながらも掘削作業をしたが翌日、掘削した箇所が崩れていたことがあった」と自身の経験談を紹介し、「“危ない”と思った感覚を大切にしていればよかった」と知覚的判断の重要性を指摘した。また、(株)ダイアテックの丸山聡氏は、コンクリート構造物の打音点検について、「打音点検には視覚や聴覚などの感覚が必要だがそれ以上に経験も必要になる」と指摘。その上で、「人間の感覚だけでは限界があることからそれを補う装置や機器が必要となる」と強調していた。